

2020年10月28日

五十六年前の東京オリンピックの中で最も記憶に残っているのは、閉会式の各国選手入り混じったの入場行進でした。それまでは整列し音楽に合わせて行進する姿が当たり前と置いていた一人の十一歳の少年（私）にとつて、とても衝撃的でした。自由の喜び、美しさに心が大きく動いたことを覚えています。二十六日の月曜朝礼では次のような話をしました。



（手話で）「みなさん」「おはよう」「ごさいます」今年の八月、夏休みの間に東京でオリンピックとパラリンピックが開かれる予定でした。コロナウイルスによる病気が世界中に広がったため、来年に延期となりました。

東京でオリンピック、パラリンピックが開かれるのは、二度目になるはずでした。一度目は一九六四年、私が小学校六年生の時でした。そのとき、オリンピックの番組はテレビで見ましたが、パラリンピックの番組をテレビで見た記憶はほとんどありません。テレビで放送されることが少なかったことが原因かもしれません。また、六年生の私自身がしょうがいのある方々のことが、よくわからなかったのかもしれない。

今から五十年以上も前、私が小学生の頃は、しょうがいのある方々の生活をみんなど守り、支えるという考え方が今ほど進んでいませんでした。多くの人達が、しょうがいのある方々は、静かに家や病院で過ごす方がいいのではないかと考えられていたのです。ですから、しょうがいのある方々

が普通に仕事をしたり、町を歩き来したりしている姿を目にすることは、ほとんどありませんでした。しかし、人々はしょうがいのある方々が、何をしたいのか、その願いが実現できるように、助け合うことが大切だということに、だんだんと気づいてきました。

昨年、私は足の手術をした次の日から、病院の中で※リハビリテーション（以下「リハビリ」とします。）を始めました。次の日から、とはずいぶん早いのだなあと思ったのですが、リハビリの先生に伺うと、大事にしすぎて動かさなければ、筋肉がどんどん固まって歩けなくなるとのことでした。手術後の痛みがあり、足を曲げることができないのに、大丈夫かなあと思いながら、毎日一時間のリハビリをすることになりました。

最初の日、リハビリを行う広い部屋で、先生からこれからのリハビリの進め方について詳しく伺いました。

そのときです。両脇を二人の先生に支えられて、リハビリをしている方の姿が目に入ってきました。その方の片方の足の太ももより先には、義足という足の代わりになる道具が付けられていました。ゆっくりと一歩一歩前に進む練習をしていました。顔立ちや姿から、まだお若い方のようにでした。

それから、リハビリの時間に頑張っている姿を何度も見かけました。思うように歩けないつらさに負けずに、前を向いて痛みを耐えながら歩く姿に心が震えました。その姿を間近に見て、私も頑張るぞという気持ちが強くなりました。そして、その方がいつか病院を退院し、家の中を自由に歩いたり、近くの公園を散歩したりできます

ように、と願い祈りました。いつか、どこかでおの方に会えたら、私の心を励ましていただいたお礼を言いたいと思います。

しょうがいがあるとか、ないとかではなく、誰もが神さまに守られて、共に助け合って生きる仲間なのです。立教では、そのことを最も大事なことで教えて、そして、学んでいるのです。

来年に延期となったパラリンピック、私はぜひチケットを買って、見に行きたいと思っています。しょうがいがあったとしても、のびのびと、自分のしたいことに精いっぱいチャレンジする世界の中の選手のみなさんにお会いし、近くで応援したいのです。そして、病院で出会った方のように、選手のみなさんから、多くの大切なことに気づかせていただきたいと思います。

（手話で）「みんな」「いっしょに」「たすけ合っ」「いきましよう」「おはなしを」「おわります」



三十代の頃、特別支援学級担任をしていた私は、多くの子どもたちと出会いました。しょうがいがありながらも命の尊さを輝かせながら、毎日笑顔で生きる子どもたちから気づかされ教えられたことは、聖書の教えと共に現在まで、子どもたちを信じ、尊敬する思いの源となっています。

（立教小学校校長 佐々木 正）

※お子さんたちには「リハビリ」と略語でお話しました。本稿では、正式名称として「リハビリテーション」の語を最初だけ使用いたしました。